

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	西田 諭子 【比較社会文化学専攻 平成22年度生】	要 旨
論文題目	ショパンのピアノ作品の調性構造－調的参照点としての強調音の構造的機能－	この論文はポーランド出身の作曲家である、フリデリク・フランチシェク・ショパンのピアノ作品を事例として、19世紀前半の西洋音楽における調性の様相を明らかにすることを目的としている。19世紀の西洋音楽はヴィーン古典派によって確立された調性構造が徐々に解体し、20世紀の無調へと向かう大きな流れがあるが、そのなかでショパンのピアノ作品もまた調性の諸現象を同時代の音楽作品群と共有している。これまでのショパン研究でも部分的に調性や和声についての言及はあるものの、調性解体の構成要素を網羅的に抽出した研究は出ていない。この論文では、いわゆる『ナショナル版』と呼ばれる楽譜に所収のピアノ独奏作品 153 曲を対象としてそれらを丹念に分析し、調性解体の一つの要因として単一の主調による支配がドミナント・トニック軸に関して弱体化する現象を、調的参照点という概念を用いて、主音とは別の第二の調的参照点が形成されること、さらに強調音の存在を指摘し、それによって、楽曲における構造的凝集性の強化と同時に主調支配の浸食が現われることを明らかにした。また、この調的参照点の二重化がショパンの作品における調性解体としての主調の浸食に対して、従来指摘されてきた半音階的書法の他に、重要な要因となっていること、さらに後の複調性の萌芽とも考えられることが指摘された。 審査委員会は 12 月 24 日に第 1 回が開かれ、内容の大筋については十分に論じられ、詳細な分析や還元譜というやり方で、和声構造の変化をみる方法がとられていることに対し、評価がされたが、ショパン自身がピアニストであり、また申請者もまたピアニストである点で、鍵盤に対する手の身体感覚での強調音や調的参照音のとらえ方もできること、さらにそれが音楽作品の持つ創作と享受の関係にある演奏の位置づけも踏まえた議論の展開が望まれた。また、文献表などの細部の修正も求められた。これらに対して申請者は適切な修正を加えて、修正版を審査委員で検討した結果、十分であることが認められたので、1 月 30 日に公开发表を行なった。発表会は大変多くの出席者があり、論文それ自体のみならず、19 世紀西洋音楽の主調の考え方など豊かな議論があった。その後の最終試験においては、申請者がポーランド語からのショパンの書簡の翻訳に携わったことや、英語圏ドイツ語圏など海外の文献に精通していることも確認した。以上から、本審査委員会は全員一致で本論文が非常に高い水準で学位、博士（人文科学）、Ph.D. in Musicology に十分ふさわしいと判断した。
審査委員	(主査) 教授 永原 恵三	
	准教授 小坂 圭太	
	助教 井上 登喜子	
	准教授 中村 美奈子	
	聖徳大学音楽学部 教授 徳丸 吉彦	
インターネット公表	<div><div>○ 学位論文の全文公表の可否（可 ・ 否）</div><div><div>○ 「否」の場合の理由</div><div><div>ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</div><div>イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</div><div>ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</div><div>エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</div><div>オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</div></div></div><div>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</div></div>	